

---

## 苦難を乗り越えて立ち上がる／震災の1日を振り返って

(小野寺正子／平澤智子、ナース発 東日本大震災大震災レポート、東京、2011、38-41/42-46)

2015年9月18日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

### ■震災の1日を振り返って

澤 智子 看護師長補佐会 岩手県立釜石病院 副総合看護長

県立釜石病院は耐震診断で震度 6 程度の地震で倒壊の恐れがあるとされ、2011 年 4 月から耐震工事が予定されていました。その矢先の震災でした。被災当日の入院患者は 205 人、外来には受診者や検査予定者、その家族もいました。勤務職員 235 人中看護職員は 98 人の看護師と 14 人の看護補助者でした。耐震工事を控えていたこともあり、屋外非難は必須と考えた職員がほとんどであったことが、短時間で避難準備を整える要因となりました。情報断絶のような状況で、看護職員も他部門もがんばることができたのは、毎日数回行われた全体ミーティングのおかげでした。今どのような状況で、何をしなければならないのか、何を求められているのか、院長、事務局長、DMAT、総看護師長などから発信されました。3 月 11 日の震災により建物は大きなダメージを受けましたが、スタッフ達で支えあい、患者の安全確保にあたり 1 人の犠牲者も出すことなく非難することができました。

とはいえ、震災直後から現在までを振り返り、多くの課題を見出すことができました。災害マニュアルはあるもののアバウト過ぎて個人がどのように動けばよいかかわからず、具体性に欠けている。勤務時間に応じた部署のリーダーはだれで、どのように行動するのか、メンバーの役割は何か、実際の動きが見えるマニュアルの修正が急がれます。また、災害時にスムーズな連携がとれるよう、部署内外を問わずコミュニケーションを良好に保ち、風通しの良い職場環境を普段から心がけていかなければなりません。被災直後からの記録として映像データに残すことが不足していました。記録に残すことで次に役立つことがたくさんあります。

### ■東日本大震災を経験して

熊谷 質子 岩手県立大船渡病院

岩手県立大船渡病院は岩手県沿岸南部に位置し、救命救急センターを併設した 489 床の広域基幹病院で、災害拠点病院でもあります。このたびの震災では、高台にある当院は建物に大きな被害はなく、県南沿岸部の被災地では唯一、震災前と同様の機能を維持し続けました。

## ■苦難を乗り越えて立ち上がる

小野寺 正子 岩手県立高田病院

地震による津波が病院にきた。津波は病院にぶつかり、水位がどんどん高くなる。4階の窓ガラスが割れて病室内に濁流が入り込み、足がとられそうになる。身の危険を感じ、屋上に駆け上がる。屋上に集まったところで点呼をとる。姿の見えない看護師の身を案じながら、波が引けてからの活動と役割分担を決めた。日没までわずか1時間。それまでに患者、スタッフの安否確認、屋上で避難するための準備をしなければならない。しばらくすると水が引けてきて、4階まに下りることができた。廊下や病室、がれきの下に何人かの遺体が見えた。近づいて名前を確認する。津波が来る前はよくわかっていた患者なのに、一目見ただけでは性別も名前もよくわからないほど変化している。気管切開の瘻孔、胃瘻チューブ、褥瘡など体の特徴から確認する。遺体が誰なのかわかるように名札を貼り、4階のベッドに安置した。

人工呼吸器がついた患者の部屋では、医師が震えながらバッグバルブマスクを押していた。首まで浸かりながら押し続けていたのだという。幸いにもマットレスが浮いて、患者は沈まずにいた。逃げ遅れた看護師もカーテンにつかまったり、患者のそばでマットレスと共に浮いたりして全員無事だった。しかし、8人の職員が患者誘導中に波に流され命を失った。

間もなくすると、自衛隊やDMATのヘリコプターが何機も来て、患者や一般市民、職員の搬送が始まり震災からちょうど24時間後全員の避難が終了した。次の日からも避難所を拠点に医療活動を自分たちができる範囲で活動した。

そして震災から3か月、全国の皆様に支えられ、苦難を乗り越え新たに「新 高田病院」が立ち上がった。